



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～番外編④～

母・夏子に当時のことをきいてみた



松岡園子

今号では、母にインタビューした内容を載せています。

私が中学生だった頃、祖母が亡くなる前後から母の統合失調症が再発しました。

身のまわりのことや家事、仕事もできなくなり、幻聴に悩まされていた頃です。

症状が強い時の記憶は全くないのだそうですが、覚えている範囲で当時の出来事や気持ちを振り返ってもらった内容を紹介します。

母を「私」とし、私を「ゆり」としています。ゆりから見た祖母は「祖母」としています。

読みやすくなるように、一部表現を変えている部分もございます。

——祖母（＝ゆりの祖母・夏子の母）の体調が優れなくなってきた頃から、統合失調症の症状が再発してきたことがありましたが、その頃のことで覚えていることを教えてください。

祖母の体調不良が心配で、不安で、心細かった。

しかし、ゆりの友達が遊びに来てくれたり、私たち母娘を家に呼んでくれるママ友達がいたため、少し気がまぎれた。

私が44歳、ゆりが12歳の頃、検査結果から入院が必要だということで、祖母が入院した。そうすると、それまで祖母の助けを得ていた家事と塾の仕事、子育てを全て1人ですることになり、肩に重くのしかかってきた。

そののち、祖母が胃がんであることが判り、3か月後に亡くなった。

応援してくれる人がいなくなった。支えてくれるものがなくなってしまったため気分が落ち込み、仕事が続けられなくなった。

奈良の親戚の家でしばらく一緒に住ませてもらった。奈良から神戸に戻ってきて、ゆりは神戸の中学校に通い始めたが、制服の用意もしてあげられなかった。そのうち、自分で交渉して卒業生のお下がりをもたらってきていた。

毎日のお弁当も作ってあげられない。うかんでこない。

でも、何を食べているのか、お弁当をどうしているのかが気になっていた。気になっているが、訊けなかった。何もできなかった。

親としての責任が果たせてないなあと思い、親の務めが果たせないのが残念だった。

でももう、精一杯で、家事や人のことまで気がまわらない。判断がつかなかった。

45歳の夏に1か月入院し、退院してから、近所の精神科の医院に通院し始めた。その時の先生が、「薬を飲んでいないからこうなった(再発した)」と教えてくれた。それから毎日、薬を飲むようになった。

薬を飲まないといけない病気なんだとその時にわかった。祖母は、飲まなくてよいと言っていたけれど、やっぱりいるねんなあ、一生かかるんやなあと思った。

仕事ができず英語塾をひらくことで得ていた収入がなくなり、福祉事務所に生活保護の相談に行った。しかし、貯金がある状態では生活保護を受けることができないと言われ、あきらめた。

その時に福祉事務所で福祉作業所(リハビリのための通所施設)のことを教えてもらい、そちらに通うことにした。そこへは3年間楽しく通った。病気のことを理解してくれる人が周りにいてくれることで安心した。お弁当作りなどの活動でもらう工賃は、月3,000円だったが、立ち直っていくことができるように応援してもらえたことが力になった。調理の活動が、家でも何か作ろうという気分させてくれ、家でも料理ができるようになってきた。

そこへ来ている人たちが、障害年金のことを話していた。それまで障害年金のことは知らなかったが、区役所で訊いてみると、受給対象になるかもしれないとのことだった。

ゆりは中学卒業後の進路選択を、働きながら定時制高校に通うと決めていたが、私は、「昼間の高校に行ったらいい」と言った。でもその反面、頼りがほしいという気持ちもあった。祖母が亡くなってからは、頼りにできる人がいなかった。「昼間の高校に行ったらいい」と言いつつ、生活の安定を求める気持ちもあった。

私は病の渦中の記憶が全くないが、ゆりに幸せになってほしいといつも願っていた。

たとえ私の身に病が押し寄せてきて、記憶がなくなったとしても、ゆりに幸せになってほしいということは、いつも思っていた。

当時を振り返り、語ってもらった内容は以上です。状況や症状はそれぞれ異なると思いますが、患者さんの理解・サポートのお役に立てることがあればと、母の許可を得てご紹介しました。